

大正期を代表する
女性作家の全貌。
待望の初出復刻版全集。
全作品を網羅。

田村俊子全集

全9巻＋別巻1

監修・
黒澤亜里子
長谷川 啓

ゆまに
書房
YUMANI
SHOBOU



大正文壇最大の女性作家・田村俊子。 その作品の全貌が明らかに なる初の 全集を、初出復刻の形式で刊行。

田村俊子全集 全9巻・別巻1の収録内容

◆第一巻◆明治36年～明治43年（一九〇三～一九一〇）

小説「露分衣」（『文芸倶楽部』）／小説「花日記」（『女鑑』）／小説「小萩はら」（『女学世界』）／小説「夕霜」（『新小説』）／小説「夢のなごり」（『文芸界』）／小説「白すみれ」（『女鑑』）／雑文「瘦せて帰られなば詩想を得て」（『手紙雑誌』）／雑文「賞めてやらざりしが口惜しく候（妹の死を報ず）」（『手紙雑誌』）／小説「乙女写真帖」（『女学世界』）／小説「若紫」（『女鑑』）／小説「春のわかれ」（『文芸界』）／小説「露」（『新小説』）／詩「かざし笠」（『文芸界』） ほか

◆第二巻◆明治44年・大正元年（一九一・一九一二）

小説「あきらめ」（『大阪朝日新聞』）／小説「静岡の友」（『新小説』）／劇評「帝国座出勤女優の予評」（『新小説』）／雑文「私の女優を志した動機」（『新婦人』）／小説「浮気」（『美芸画報』）／雑文「私どもの夫婦間」（『新婦人』）／小説「本門寺のさくら」（『文章世界』）／小説「生血」（『青鞥』）／雑文「一体に欲が熾んになる」（『婦人乃鑑』）／雑文「文芸の影響を受けたる恋愛は崇高なり」（『女子文壇』）／小説「魔」（『早稲田文学』）／小説「離魂」（『中央公論』）／小説「誓言」（『新潮』）／小説「悪寒」（『文章世界』）／小説「嘲弄」（『中央公論』）／雑文「匂ひ」（『新日本』） ほか

◆第三巻◆大正2年（一九一三）

小説「遊女」（『新潮』）／雑文「同性の恋」（『中央公論』）／小説「初雪」（『読売新聞』）／小説「おしの」（『婦人評論』）／小説「雪ぞら」（『大阪朝日新聞』）／雑文「ある令嬢に」（『新婦人』）／雑文「かくあるべき男」（『中央公論』）／小説「繡ひのどてら」（『読売新聞』）／雑文「読んだもの二種」（『新潮』）／雑文「笑ひ顔」（『ニコニコ』）／アンケート「上場して見たき脚本三種」（『早稲田文学』）／評論「演劇

田村俊子略年譜

- 一八八四（明治一七）年 一歳
四月二五日、浅草区蔵前町の米穀商佐藤家に、父了賢、母きぬの長女として生まれる。
（原籍は、足立区中居町四三番地。と志と命名。）
- 一八九〇（明治二三）年 七歳
四月、府下瑞光小学校に入学。
- 一八九三（明治二六）年 一〇歳
四月、浅草小学校に転入。
- 一八九四（明治二七）年 一一歳
二月一日、下谷区根岸小学校に転入。この頃、同区金杉上町二八番地に居住。翌二八年七月二五日、転居のため、妹茂子とともに、浅草小学校に復校。
- 一八九六（明治二九）年 一三歳
四月、お茶の水女子高等師範付属女学校に入学。一学期で退学し、東京府高等女学校（のちの府立第一高等女学校・現白鷺高校）に転学。
- 一九〇一（明治三四）年 一八歳
四月、日本女子大学校国文科に入学したが、心臓病にかかり、一学期で退学。
- 一九〇二（明治三五）年 一九歳
四月、小説家を志し、幸田露伴の門に入る。露伴の名を与えられる。同門の兄弟子にあたる田村松魚と知り合う。妹茂子病没。
- 一九〇三（明治三六）年 二〇歳
二月、処女作「露分衣」を『文芸倶楽部』に発表。

的の趣味」(『時事評論』)／小説「親指の刺」(『読売新聞』)／雑文「しょっぱいあじのする泡鳴さんの小説」(『新潮』)／小説「木乃伊の口紅」(『中央公論』)／雑文「柔順な良人」(『新小説』)／小説「揺籃」(『新潮』)／小説「山吹の花」(『新日本』)／小説「緑の朝」(『文章世界』)／雑文「新小説」編集主任に」(『読売新聞』)／小説「青麦のそよぎ」(『現代』)／雑文「再び「新小説」編集主任に」(『読売新聞』)／劇評「新富座」(『演芸画報』)／小説「憂鬱な匂ひ」(『中央公論』) ほか

◆第四巻◆大正3年(一九一四)

小説「市の晩」(『大阪朝日新聞』)／小説「時雨の朝」(『秀才文壇』)／小説「楽屋」(『処女』)／小説「お豊」(『新公論』)／小説「整二のころ」(『新小説』)／小説「白昼の思ひ」(『新潮』)／雑文「昔ばなし」(『新日本』)／小説「昼の暴虐」(『中央公論』)／小説「或る日」(『婦人評論』)／小説「ぬるい涙」(『早稲田文学』)／小説「やま子」(『大阪毎日新聞』)／劇評「海の夫人」を観て」(『時事新報』)／小説「寒椿」(『新潮』)／「私の見た女優」(『新婦人』)／小説「炮烙の刑」(『中央公論』)／雑文「双葉記」(『読書世界』)／雑文「匂ひ」を書いた頃」(『新日本』)／小説「夜道」(『読売新聞』)／小説「暗い空」(『読売新聞』)／小説「春の晩」(『新潮』)／小説「枸杞の実の誘惑」(『文章世界』) ほか

◆第五巻◆大正4年(一九一五)

劇評「七月中の芝居」(『演芸画報』)／小説「二人」(『淑女画報』)／小説「二人の世界」(『婦人画報』)／小説「母の出發」(『文章世界』)／雑文「冬の日を見詰めながら」(『読売新聞』)／小説「約束」(『大阪朝日新聞』)／小説「鳩」(『読売新聞』)／劇評「新年劇合評(下)」(『読売新聞』)／雑文「一日一信」(『読売新聞』)／劇評「二月の帝劇」(『演芸画報』)／時評「二月の創作壇」(『新潮』)／小説「お角力から帰って」(『中央公論』)／小説「男の先生へ」(『新潮』)／小説「圧迫」(『中央公論』)／小説「下女の園」(『新公論』)／小説「夜着」(『中央公論』)／劇評「尾上芙蓉」(『演芸画報』)／小説「命」(『婦人画報』)／小説「明日」(『女の世界』)／対談「俊子の観たる野依秀二」(『女の世界』)／小説「兄と妹」(『少女画報』)／小説「人形の踊り」(『中央公論』)／小説「一日の生活記録」(『文章世界』)／雑文「凭な小説が欲しい」(『時事新報』)／雑文「緑の誘惑」(『新潮』)／小説「彼女の生活」(『中央公論』) ほか

◆第六巻◆大正5年1月～6月(一九一六・一～六)

小説「栄華」(『文章世界』)／劇評「大正四年劇壇回顧 五月」(『演芸画報』)／小説「お七吉三」(『女の世界』)／小説「お夏」(『娛樂世界』)／小説「友達」(『淑女画報』)／小説「邂逅」(『処女』)／小説「放浪」(『新潮』)／小説「小藤」(『中央公論』)／小説「誘惑」(『婦人画報』)／雑文「女子の結婚適齢」(『婦人公論』)／小説「艶子の家出」(『婦人公論』)／アンケート「酒」(『文章世界』)／小説「裾模様」(『大阪毎日新聞』) ほか

◆第七巻◆大正5年7月～12月(一九一六・七～一二)

小説「藤いろ」(『娛樂世界』)／紀行文「京都奈良印象記」(『中央公論』)／小説「いつまで」(『婦人公

一九〇六(明治三九)年 一三歳
夏頃から岡本綺堂、岡鬼太郎、杉廣阿弥、栗島狭衣らを中心とする毎日派文士劇の女優となる。舞台名も佐藤露英。

一九〇七(明治四〇)年 一四歳

一月、「袖頭巾」を「東京毎日新聞」に発表。

一九〇八(明治四一)年 一五歳

九月、川上貞奴らによる帝国女優養成所が設立され、その第一期生となる。

一九〇九(明治四二)年 一六歳

五月、米国から帰朝した田村松魚と結婚(法律的には入籍していない)。下谷区谷中天王寺町一七番地に新居をいとなむ。

一九一〇(明治四三)年 一七歳

「大阪朝日新聞」の懸賞小説に「あきらめ」を町田とし子の名で投稿する。八月半ば、中村春雨(吉蔵)主宰の新社会劇団に参加。十一月、懸賞小説の発表があり、「あきらめ」が二等当選。一等の該当作品がなく首位となり、賞金一千円を獲得。

一九一一(明治四四)年 一八歳

一月一日から三月二日まで、「大阪朝日新聞」に「あきらめ」が連載される。「あきらめ」(金尾文淵堂、七月一日)を刊行。九月、青鞥社の賛助員となる。この頃から、長沼智恵子との交遊始まる。

一九一二(明治四五・大正元)年 一九歳

七月、坪内逍遙の文芸協会に加わったが、二日でやめる。

一九一三(大正二)年 三〇歳

四月、「木乃伊の口紅」を「中央公論」に発表。この頃、下谷区谷中天王寺三四番地へ転居。

一九一四(大正三)年 三一歳

四月、「炮烙の刑」を「中央公論」に発表。同月から「読売新聞」の文芸欄の執筆陣に迎えられる。六月、「春の晩」を「新潮」に発表。「木乃伊の口紅」(牧民社、六月一日)を刊行。

一九一六(大正五)年 三三歳

この年の年末から翌年の早春まで、湯浅芳子と谷中天王寺の家に同居する。当時、松魚とは、別居状態にあった。

一九一七(大正六)年 三四歳

春頃から夏にかけて、鈴木悦との恋愛が生じ、最初は高輪、続いて三田の功運町に二人で隠れ住む。

一九一八(大正七)年 三五歳

一〇月、メキシコ丸で横浜を出發。ヴィクトリア着。バンクーバー東カドワア街一三五番地にある大陸日報社三階の悦の部屋に移る。

一九一九(大正八)年 三六歳

一月、北米滞在中唯一の小説「牧羊者」を「大陸日報」(二月一日)に発表。この年、コロンビア街一八一八番地に転居。

論」／小説「不安」(『文章世界』)／小説「二たつの生」(『読売新聞』)／劇評「河合の研究」(『演芸云報』)／雑文「嫉妬を超越せよ」(『女の世界』)／小説「女優」(『女学世界』)／雑文「清水寺の舞台」(『新潮』)／紀行文「面白い大阪の女と懐しい京都の女」(『婦人公論』)／小説「薄光」(『新家庭』)／雑文「島原の太夫」(『新潮』)／小説「彼女の一生」(『婦人雑誌』)／小説「姉の家」(『婦人画報』)／雑文「文学を志望する若き婦人に与へて」(『婦人公論』)／小説「私の好きな恋もの語り 恋の女王」(『婦人公論』)／雑文「一日一信」(『読売新聞』)／小説「河原撫子」(『少女画報』)／小説「蛇」(『中央公論』) ほか

◆第八巻◆大正6年～昭和11年(一九一七～一九三六)

小説「反抗」(『新聞の新聞』)／雑文「下町で育ったお正月の思出」(『ニコニコ』)／小説「魔か聖か」(『黒潮』)／小説「再会」(『新日本』)／雑文「女と東京」(『婦人公論』)／小説「めくら」(『文章世界』)／雑文「悲しみと楽しみ」(『中央公論』)／小説「淋しみ」(『婦人公論』)／小説「油やお染」(『淑女画報』)／雑文「気分の上品な人」(『新潮』)／雑文「私の悲しみと楽しみ」(『新潮』)／小説「チュウリツプ物語」(『新日本』)／小説「錦絵」(『文芸倶楽部』)／雑文「選後に」(『処女文壇』)／小説「第一印象」(『太陽』)／雑文「選後に」(『処女文壇』)／雑文「都会生活者の採り容れ得べき自然生活味」(『中央公論』)／紀行文「奈良へ」(『ポケット紀行文粹(新潮社)』)／雑文「浴衣姿の美人に対して」(『中央公論』)／小説「月見草」(『読売新聞』)／小説「破壊する前」(『大観』)／雑文「二とつの夢」(『文芸春秋』) ほか

◆第九巻◆昭和12年～昭和15年(一九三七～一九四〇)

雑文「働く婦人たちへ」(『婦人運動』)／雑文「富士山を見る」(『明日香』)／評論「同性を護る」(『婦人公論』)／小説「昔がたり」(『文学界』)／雑文「内田多美野さんへお返事」(『新女苑』)／書評「秋鳥集を読む」(『むらさき』)／小説「愛は導く一小さき歩み(完)」(『改造』)／評論「第二世の子女の教育は外国人として扱へ」(『東京日日新聞』)／雑文「銀座の夜」(『文芸』)／雑文「白珠集」(『明日香』)／座談会「世界の女性生活を語る」(『新女苑』)／雑文「メーキアップ」(『婦人公論』)／評論「日本婦人運動の流れを観る」(『都新聞』)／雑文「テンニング爺さんの思ひ出」(『婦人公論』)／雑文「アメリカの夏の印象」(『明日香』)／小説「残されたもの」(『中央公論』)／雑文「卑俗な美感覚」(『帝国大学新聞』)／雑文「秋」(『改造』)／雑文「茶室に寝て」(『新女苑』)／小説「馬が居ない」(『文芸』)／雑文「婦人の因循性」(『日本読書新聞』)／雑文「或るプログラム」(『日本読書新聞』)／雑文「豪奢な日光」(『むらさき』)／小説「愛の簪」(『中央公論』)／小説「山道」(『中央公論』)／小説「侮蔑」(『文芸春秋』)／雑文「婦人の大陸進出とその進歩性」(『婦人公論』) ほか

◆別巻

第1章 俊子とその時代／第2章 表象への視点——女性領域・メディア・境界・移動／第3章 作品論の現在／第4章 「女声」——資料紹介／第5章 著作年譜・生涯年譜

一九三(大正一二年) 四〇歳
三月、合同教会赤川美盈牧師の手により鈴木悦と結婚。五月、俊子の書簡が「帰朝を告ぐる 佐藤俊子さんからの来信」と題して『読売新聞』(五月一四日)に掲載される。

一九二四(大正一三年) 四一歳

三月、サンフランシスコに赴き、四月中旬から、『新世界新聞』に論説を発表しはじめる。三月、鈴木悦が『日刊民衆』(民衆社)創刊。六月、新世界新聞社を退き、バンクーバーに帰る。

一九二七(昭和二年) 四四歳

この年から昭和四、五年にかけて、『大陸日報』紙上に俳句多数、詩等を発表する傍ら、文芸欄で詩の選評もする。三月末、キースロード二三四六番地へ転居。

一九三二(昭和七年) 四九歳

二月、鈴木悦が一時帰国の予定でバンクーバーを発つ。

一九三三(昭和八年) 五〇歳

九月、鈴木悦が郷里豊橋の三浦病院で盲腸炎により急逝。二月、俊子はバンクーバーを引き払いロサンゼルスへ赴く。一九三六年二月まで同地に滞在。

一九三六(昭和十一年) 五三歳

二月、査証の書き換えのため、バンクーバーに戻る。再度、米国入国を計るがビザが下りず、三月、日本に帰国。佐藤俊子の名で文壇に復帰。

一九三七(昭和十二年) 五四歳

この年の初め頃、窪川鶴次郎とのあいだに恋愛関係が生じる。この年、母きぬ死亡。

一九三八(昭和十三年) 五五歳

一月、東京を発ち、福岡から飛行機で中国に出発。中央公論社の特派員として、上海から南京へ向かい、南京で越冬。

一九三九(昭和十四年) 五六歳

一月、揚州、蘇州、鎮江、杭州を回って上海に戻り、月末北京へ発つ。途中、青島、天津などに立ち寄る。北京では、はじめ六国飯店、韓記飯店などに滞在し、日本の新聞記者や立野信之、武田泰淳、奥野信太郎、丸岡秀子夫妻などと交流。

一九四〇(昭和十五年) 五七歳

秋、北京飯店に移り、翌年には西城關才胡同の平等俊成家に寄寓する。

一九四二(昭和十七年) 五九歳

日本大使館囑託となり、取材および資料の確保その他、軍部の援助のもとに、五月、月刊婦人雑誌「女声」を創刊。後に、上海虎丘路(旧博物院路)一四二号のビルの一室に女声社として独立。

一九四五(昭和二十年) 六二歳

「女声」続刊に奔走する傍ら、上海を訪れた久保田万太郎、武田泰淳、堀田善衛、阿部知二らと、数年来親しく交流。四月一三日夜、陶晶孫の晩餐の帰路、脳溢血のため昏倒。一六日の午前九時永眠。四月一八日、東本願寺上海別院において、日本大使館および南京中央政府中央書報発行所、太平出版印刷会社の合同葬が行われた。法名は釈尼文俊。

大正期を代表する女性作家である田村俊子（一八八四―一九四五）の作品を初出復刻の形で集成する。

大正期の一流作家という認識を覆した、『田村俊子作品集』（全3巻、オリジン出版センター、一九八七―八八）の刊行以来、その評価は高まるばかりである。田村俊子について語るのは、近代女性作家研究のスタンダードであると言つても過言ではないだろう。

田村俊子がそこまでのメインストリームとなったのは何故だろうか——それは女性の持つ可能性をどこまでも体現しようとした存在だからではないだろうか——作家であり、女優であり、ジャーナリストであり、自分を偽ることのない恋愛観を持ち、海外への開かれた眼を持ち、当時の女性たちへの啓蒙を活発に行い……このように、田村俊子はどこまでも魅力に満ちた存在なのである。

しかし、作家としての全盛期である大正前期に発表した『暗い空』『二たつの生』『女優』などの長編をはじめ、多くの短編が刊本に未収録のままであり、加えて、露伴門下の佐藤露英時代の初期作品や、カナダ時代および帰国した後の昭和期の作品は、ごくわずかの例外を除き、いまだまとまった形で刊行されたことがなかった。

前述の作品集や、生前に刊行された単行本を集めても、彼女が發表した作品の三割弱に過ぎない。本企画は、それらの新出資料を含む全作品を調査収集し、編年体・初出復刻の形態で刊行する初の全集となる。今回も、かつてオリジン出版センターの『田村俊子作品集』の編者を務めた、長谷川啓、黒澤亜里子の両氏が監修者として各巻の編集・解題を担当する。また別巻として、田村俊子の論集を新たに編み刊行する。現在までの研究成果の多くがそこに反映されることとなるであろう。

3 「あきらめ」(『大阪朝日新聞』 1911〈明治44〉年1月1日)

富枝は歸つて來て、母の手に「出て見なさい」と生徒は、富枝に手紙を渡したもので、遙か客館の方へ、使女が聞かされたので、富枝は、園藝好きの古井が、花鉢を持つて坂を下りてゆくのが見えた。何と云うでもなく呼んで見ると、彼方へ近づくを探しながらくるりと返つて、富枝に見附けると、葉巻として又歩き出した。

オリーブ色の襟が、鮮やかな。餘り白くない疵が白足袋の上へ一すばかり露はれるのが、富枝に當る。

自分の襟に染れた花汁を、自體に家客の各室へ挿して廻つて、皆から聴こさうな挨拶を



閑いそれ源流である。いまに理想の園を作つて、生花の中に埋没して暮らすと云ふ嗜好しるものがある。絶對に世に出るな、甘んじて孤独に耽れて藝術せよ。と教ふる樹藝を載く人々といふが、あの人はその主義に背向かないか何うならぬと思はれた。其目的が如何なるかを傳へたるについで、別處から贈られた牡丹を立寄らば比較して、平常された牡丹より幾分か上にて、平素注意を向けなければ何處の一の上にも懸殊深く立くなつた。――さう根柢を作つて、立派な美しい花を將來に咲かせやうと思ひながら樹の主義。その根柢が有名を急いで花の咲くべき期がない。さう云つた見識樹藝の際には、後庭の繁しき樹に群にたゞたきになつて、富枝耳の奥に再び盛き起つたやうに思はれ。

立並んだ紫二階と赤い色目い色が消えたり現へたりする。袖拂と小笠帯の小さい生徒が三人手を組んで寮の門を出て来る。

青花の煙草たき、兵隊帶を下げてゐる。彼等に依りて、客館生活をしてゐる。そんな風に遊び、生きてゐたらうと當校は例になく不憚な氣がさつた。自分は明日から此校へ三、四時來ぬことになるかも知れない。二年級生はたこの櫻も春を誇つた三度目には、今は少し、悲の香ひのみ、つた。それ以外の憂鬱さと思ふと、學校を捨つるには嫌はないが、校舎を取り續つた閑逸の景物と各處より借される。例も讀むもの、他、ては寄り掛つた圖書室前の樹の木の影、行つてゐた。圖書室の窓が白い窓簾を垂れてゐた。丁度同校の上田が、當校を探しながら此所へ来た。

「もうか歸りかと思つてさしたら。」上田はアイボリー石壁のやうな童生地をしてゐる。私が赤い生地の傘よりは離れてゐる。本尊達の洋服店の看板人形と云ふ紙がゐつた。

「どんなのを仰有つて。」と聞いた。

露
分
衣

佐藤露英女史

庭の櫻は盛なりし頃は病重りに重りて、此世の最期と何事も思ひ詰めは断念せしが、風強き夕べ、朝子越しに殘されて、蜘蛛の糸より果敢なき玉の緒の、何處までもと引き盡したる果、佛と切る、折は計られぬ、暫しとばかり繁がれつ、彼は空しき遺恨となりたり、と葉隠れに紅色残る櫻の梢見上つ、お君は其處に佇み、
稍反りたる銀杏返し、引き詰れば細き面影細くなりて、長き睫毛の眼元涼しく、透き通る迄に色白さが、唇の色も薄ければ、間髪も續かぬ眉ばかり鮮明に、露きたるやうなり、其に隔たりて並べるを憐る様に増えむは名を聞きても直ぐなる心は忍ばるゝ、杉と云ひて、氣質忠實々々しく、お君の漸くいるは、書く頃より仕へ初めしなれど、乳まゐらせての添養せしにも増して、最愛しきは兩親なき哀れさに一層深くおぼゆれば、お君も幼きよりの馴染浅からぬ其人の戀しき情、取り分け懐しき思ひの爲なるべし、今しもお杉が脱したる襟袖に、ては一筋に延ばしつゝ、當惑氣に俯向くを覗き込みて、何うしても打明けられぬとお云ひか、其では杉は如様のにお味方を爲るのだね、宜しい、私の心配は拂てお呉れでないのだから、とツンとして云ふお君の、強ねたる心は唇キと並とらしく結びたるにも知らるゝを、其様に一途にお怒り遊ばすな、と杉は言ひ、

田村俊子全集

【監修】黒澤亜里子・長谷川啓
全9巻+別巻1

●全9巻+別巻1 揃予価：本体178,500円+税

A5判上製／クロス装／カバー ISBN978-4-8433-3781-3 C3393

第1回配本 全2巻

既刊・2012年8月刊

揃定価：本体38,000円+税 ISBN978-4-8433-3947-3 C3393

■第1巻 明治36年～明治43年（1903～1910）

定価：本体19,000円+税 ISBN978-4-8433-3782-0

■第2巻 明治44年・大正元年（1911・1912）

定価：本体19,000円+税 ISBN978-4-8433-3783-7

第2回配本 全2巻

既刊・2012年11月刊

揃定価：本体36,000円+税 ISBN978-4-8433-3948-0 C3393

■第3巻 大正2年（1913）

定価：本体12,000円+税 ISBN978-4-8433-3784-4

■第4巻 大正3年（1914）

定価：本体24,000円+税 ISBN978-4-8433-3785-1

第3回配本 全2巻

既刊・2013年3月刊

揃定価：本体40,000円+税 ISBN978-4-8433-3949-7 C3393

■第5巻 大正4年（1915）

定価：本体21,000円+税 ISBN978-4-8433-3786-8

■第6巻 大正5年1月～6月（1916.1～6）

定価：本体19,000円+税 ISBN978-4-8433-3787-5

第4回配本 全2巻

既刊・2015年2月刊

揃定価：本体39,000円+税 ISBN978-4-8433-3950-3 C3393

■第7巻 大正5年7月～12月（1916.7～12）

定価：本体19,000円+税 ISBN978-4-8433-3788-2

■第8巻 大正6年～昭和11年（1917～1936）

定価：本体20,000円+税 ISBN978-4-8433-3789-9

第5回配本 全1巻

2017年3月刊行予定

定価：本体17,000円+税 ISBN978-4-8433-3790-5 C3393

■第9巻 昭和12年～昭和15年（1937～1940）

定価：本体17,000円+税 ISBN978-4-8433-3790-5

第6回配本 全1巻

近 刊

予価：本体8,500円+税 ISBN978-4-8433-3792-9 C3393

■別巻『田村俊子研究——露英時代から『女声』まで』

予価：本体 8,500円+税 ISBN978-4-8433-3792-9

第1章 俊子とその時代／第2章 表象への視点——女性領域・メディア・境界・移動／第3章 作品論の現在／第4章 『女声』——資料紹介／第5章 著作年譜・生涯年譜

★関連企画のご案内

※価格は外税。詳細な内容見本がございます。弊社営業部宛て請求下さい。

文藝時評大系

全73巻・別巻5

わが国独自の文学批評のスタイル、「文藝時評」の全容を初めて集大成。「文壇」の成立期から「文壇」と「文壇ジャーナリズム」が濃密な関係をもちえた昭和45年までの「時評」を網羅。別巻として詳細な索引付す。

●揃定価：本体1,528,000円+税

明治篇 全15巻・別巻

【編・解説】中島国彦

大正篇 全14巻・別巻

【編・解説】宗像和重

昭和篇Ⅰ 全19巻・別巻

【編・解説】池内輝雄

昭和篇Ⅱ 全13巻・別巻

【編・解説】曾根博義

昭和篇Ⅲ 全12巻・別巻

【編・解説】曾根博義

時代が求めた「女性像」第Ⅰ期

大正・戦中・戦後にみる「女の一生」

全14巻【監修・解説】岩見照代 ●揃定価：本体271,800円+税

時代が求めた「女性像」第Ⅱ期

「女性像」の変容と変遷

全15巻【監修・解説】岩見照代 ●揃定価：本体323,000円+税

戦後の出発と女性文学

全15巻

【監修】長谷川啓・尾形明子 ●揃定価：本体210,000円+税

編年体 大正文学全集

全15巻 別巻1

【編集】安藤宏・池内輝雄ほか ●揃定価：本体105,200円+税



〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6

TEL.03(5296)0491

FAX.03(5296)0493

http://www.yumani.co.jp/

e-mail eigyou@yumani.co.jp

●特におすすめしたい方

近代文学、女性学などの研究者・研究機関、大学図書館・公共図書館・女性センターなど。

ご注文書

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493

年 月 日

田村俊子全集 全9巻+別巻1

揃予価：本体178,500円+税 ISBN978-4-8433-3781-3 C3393

セット

取扱店

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

お名前
ご住所
TEL ()